

⑥ 山崎覚太郎の海外出張、在外研究

工芸科漆工部助教山崎覚太郎は昭和十一年九月二日、商工省より欧米各国における工芸品の調査（工芸品の輸出増進に関する調査）のための海外出張を命ぜられた。山崎は明治三十二年六月二十六日に富山県に生まれ、同県立工芸学校漆工科髹漆部を経て大正八年本校漆工科に入学。同十三年卒業して翌十四年四月に同科助手となり、同十五年四月に講師、昭和三年一月に助教となつた。同年、宮内省依嘱の御大礼御剣髹髹製作助手、大蔵省依嘱の帝国議會御座所荘飾製作担任等をつとめ、同八年七月には漆工部理事に任ぜられた。同九年と十年には商工省より同省輸出工芸展覧会の審査委員を嘱託されている。

山崎は正木直彦らに見送られて昭和十一年九月十日に出発した。滞欧期限は翌十二年三月までであったが、引き続き文部省在外研究員として同年七月までフランスで塗装術を研究し、さらに欧州各国主要都市を旅行し、工芸界一般の趣向を調査することが許可され



山崎覚太郎と漆工部の生徒
(吉田丈夫氏提供)

た。その旅行のための申請書には旅行（十二年六月二十日〜七月十二日）の予定地としてブラッセル、アムステルダム、ハンブルグ、ベルリン、ミュンヘン、ベルン、パリ、ロンドン、リヨン、マルセイユ、モナコ、ピサ、フロレンス、ローマ、ヴェニス、ミラノ、ペロナ、ジュネーブが記されている。同年九月三日に帰国した。

商工省貿易局は山崎が海外から送った報告書を纏めて『海外工芸の新傾向』（昭和十二年七月、日本輸出工芸聯合会）として発行した。本書には商工省貿易局長新倉利広、東京高等工芸学校校長安田祿造、本校教授和田三造、商工省工芸指導所長国井喜太郎らの序文に引き続いて山崎によるアメリカ、イギリス、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、チェコスロヴァキア、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、オランダ、ベルギー、イタリア、スイス、フランスにおける工芸事情およびアメリカ、イギリスにおける日本漆器の情況に関する詳しい報告が記されている。

この旅行について山崎は後年「海外工芸事情調査の頃の思い出」（『デザイン』第三十五号、昭和三十七年八月）を書いている。それによると、まず旅行の目的については、商工省主催の商工展（農展の後身）は工芸作家の芸術的力価を示す場となったが、帝展工芸部付設以来商工展の存在意義が薄れ、折りから抬頭してきた産業工芸品の輸出振興と相まって商工省輸出工芸展（貿易局所管）へと姿を変えた。審査にあたったのはもとの商工展関係者と産業工芸関係者であった。そして、当時産業工芸の方面では欧米追従主義（外国式意匠をいかにして日本の材料技法で作るかを主眼とする）が風靡しており、それが出品奨励の方策と相まって、頼しい数の和洋合作風作品

が全国から集まったが、展覧会を五、六度開いても何の変化もない。そこで運営方法に関する反省が生じ、作家にして指導力があり、外国工芸品の思想や傾向をよくつかんで日本に知らせることのできる人を海外調査に派遣することになり、山崎もその一人に選ばれたのだという。山崎の外に和田三造、高村豊周、杉田禾堂らが調査員となり、彼らは帰国して輸出品産地を回り、或いは展覧会審査にたずさわり、マンネリズム打破を試みた。しかし、それは容易なことではなく、そのうちに戦争が始まって輸出品産地どころではなく、昭和十六年十二月以降は輸出の声も地を払って全てが「勝つため」の声に一変してしまったのであった。

⑦ 久米桂一郎銅像除幕式

昭和十一年七月二十七日、校庭で久米桂一郎銅像（胸像）の除幕式が行われた。これより先き、同十年五月、岡田三郎助、太田三郎、白瀧幾之助、武内金平、田辺孝次、津田信夫、筒崎謙斎、西田正秋、宮本純一、和田英作らが建設会実行委員となって建設費を募集し、その結果三三〇〇円余り集まった。そのうち二五〇〇円を銅像建設費とし、北村西望が原型制作および台座設計を、川西松次郎が鑄造を担当。西望は十一年二月一日原型制作に着手し同年六月一日に完成（制作費四五〇円）させた。

除幕式は白瀧幾之助の司会をもって進められ、津田信夫の事務報告、実行委員長和田英作の式辞、本校校長事務取扱岡田三郎助の挨拶、来賓式辞、遺族謝辞があり、翌月本校へ銅像が寄贈された。